

多くの文学研究者たちは『虞美人草』を失敗作だという。そしてそれが定説である。またそれに反してこの作品が好きだという方は、漱石の熱烈なファンである年配のご婦人であることが多い。そして何故か男っぽいと言われる女である私は、漱石の作品に失敗作を見出すことが出来ない。

まず、この作品を失敗作だという方の理由は「文学手法」という専門的観点からであるが、私がこの長編小説を失敗と見なさない理由は、自分の中で常に文章の辻褄が合わせられるからである。読んでいて「ここはどういうこと？」と立ち止まることがあるが、前の章へ戻って読むでもなく、見るでもなく、眺めてみると、そこにはちゃんと答えが書いてある。文章の表現の中に答えが含まれているのである。だからその符号を発見すると少し楽しくなる。そしてその符号合わせができたとき、長編小説なのに数章先への連結を食い違えることなく描けるというのはすごいなと改めて思う。『虞美人草』にはその連結を発見する楽しみがある。だから失敗作とは思えない。

そして余談であるが、私は村上春樹氏の長編小説にも同様のものを感じる。読んでいて時々手法が漱石に似ているなどと思う。そして同じように疑問を持ち、同じよう立ち止まり、同じように読み終えた章から辻褄の合う事実を発見する。それも楽しい。

そんな理由から私は、速くも遅くも読める『虞美人草』に、「失敗作」の評価を下すことはできない。